1

どうやら、頭を打ったらしい。

目を開けると、すべてのものが二重にだぶって見えた。天井の電灯……横手にある窓のカーテンの大きな花柄……そして、こちらをのぞきこんでいる小さな顔。

「あ、目を開いてる」と、その顔は言った。

声は一人分しか聞こえないが、顔はふたつ見える。寸分たがわぬ同じ顔。どちらもぼんやりとぼやけている。

動こうと思っても、手足に感覚がなかった。かろうじてできるのは、まばたきだけ。何度かそれをすると、天井の電灯が今度は三つにぶれて見え、やがてひとつになり、また小さな顔がふたつのぞきこんできて、そこで視界がすうっと狭まった。

「あれ、また寝ちゃう」

閉じた目の奥に、その声が聞こえた。そうだよ。おやすみ。

次に目を開けたときには、天井の電灯はひとつになっていた。

カーテンは開けてあり、曇りガラスの窓越しに、明るい陽の光が射しこんでいる。光の角度からして、まだ午前中のようだった。

ここはどこだろう？

自問してみて、ようやく、記憶と理性が手に手をとりあって戻ってくるのを感じた。この状況では、まったく歓迎したくない二人連れだ。門前ばらいにするためには、また気絶してしまうに限る。もう、永遠に目を覚ましたくない気分だった。

だが、やってきた理性と記憶は、しっかりと居座ってしまった。目もばっちり覚めている。五感はすべて正常。いまいましいほどに。

おまけに、身体中が痛んだ。無数の小さい金槌で、全身のいたるところをひっぱたかれているような感じだ。それも外側からではなく、内側から。とりわけひどいのが頭と肩で、特に右肩は、突如反乱を起こして身体から独立しようとする右腕と全面戦争しているみたいだった。実際、脱臼しているのかもしれない。

まぶたを動かすだけで、頭に響いた。

やばいな……こりゃ、本当にどうかなっちまったのかもしれない。このまま一生起き上がることもできず、ベッドに釘づけなんてことにもなりかねない。

記憶が言う。（無理ないよねえ、あの高さから落ちたんだから）

理性が言う。（それでも、生きてただけめっけもんじゃないの？）

頭を振ってそのふたつを追い払おうという馬鹿な試みをしたために、思わず声をあげてしまった。あ、痛て、などという生易しい声ではない。わめいたというのが正解だ。

と、どこかでドアが開くような音が聞こえた。軽い足音が続き、すぐ近くで止まる。痛みをこらえるために目を閉じていたので、それらの物音も、続いて聞こえてきた声も、みんな暗闇のなかのものだった。

「良かった。気がついたんだね」

おそるおそる、片目ずつ開いてみると、また顔がふたつ見えた。だぶっている。そっくり同じ顔が並んでいる。

まだ完全じゃないんだ、と思った。それとも、この先ずっとこんなふうに、なんでもだぶって見えるのだろうか。もっとも目玉はふたつあるのだから、その方が自然なのかもしれないが。

「気分は」

「どうですか」

と、ふたつの顔は言った。

それで初めておかしいと思った。左の顔が（気分は）と言い、右の顔が（どうですか）と言ったように見えたからだ。

じいっと見上げていると、ふたつの顔は面白がっているような表情を浮かべた。

「僕たちの顔に」

「何かついてますか？」

また、右と左の顔で言うことが違っていた。器用な混乱だ。

試しに片目をつぶってみた。ふたつの顔は、顔と顔を見合わせた。

「僕らに」

「ウインクしてるの？」

反対側の目を試してみると、ふたつの顔は笑った。左の顔には右の頬にエクボがあり、右の顔には左の頬にエクボができる。

両目を開けて、ほんの少し首を起こしてみた。ふたつの顔にはそれぞれ別な身体がついていた。同じシャツとセーターを着ているが、胸のところについている柄が違っている。ふたつともアルファベットだが、一人はT、もう一人のはS。

ふたつの顔は声を揃えて言った。「僕たち、双子なんです」

2

そもそも、こんな町にやってきたこと自体が間違いだったのだ。

最初はうまい話だと思った。このところちょっと商売が不振続きで、お手元不如意でもあったから尚更だ。

ローカルな新興住宅地。二十一世紀になれば新幹線かリニア・モーターカーが走るであろ

うという楽観的な見通しの上に立ってできている、図々しい町だ。もとは何もなかった丘の上に、突然現われた無国籍的な建て売り住宅の大群は、ほとんど映画のセットのように見える。

パステル・カラーのこの町は、丘の上から、ふもとにある土着の住人たちの、ひとまわり小さな町を見おろしている。丘の上の町が「今出新町」。丘の下の土着の町が「今出町」。位置的にも色彩的にも、新町は今出町の見ている淫らな白昼夢のようだった。

新旧ふたつの町が共有しているのは、今出町の真ん中にある私鉄線の駅だけである。このささやかな鉄道は、東京という心臓めがけて近郊から殺到する血管の末端も末端、右足の小指の爪の下を流れている毛細血管みたいなものだった。

柳瀬の親父は、いい話だから特別にあんたにだけ教えると言っていた。七対三で取り分を寄越せばそれでいい、欲張っちゃおしまいだからなあ——などと、めずらしく殊勝な顔をしていたことからして、疑ってかかるべきだったのだ。

（おきゃくは女の一人暮らしで、引っ越してきたばかりだし、人嫌いなんで近所づきあいもない。新しい町だから、あんたがぶらりと出かけて行ってそこらを歩いていても、怪しむ人間なんかいやしねえ。楽な仕事じゃねえの、え？）

お説ごもっとも。本当にいい話だった。

ステップファザー・ステップ

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。